

ブルース。そしてことば探しのたたかい。

日高 由貴

はじめに

—わたしがまだ子どもだったころ、フロリダの家の前であそんでいると、ふとった女たちが通っていったものだった。えびの漁場で働く女たち。よごれて、ひどい臭いをさせて、それでも笑いさざめきながら家路をたどる女たち。決まって笑っていた女たち。ある日のこと、わたしの耳にこんなことばが聞こえた。あんな、ブルースなんていってもさ、ただの唄じゃないか。あんな、ブルースなんていってもさ、ただの唄じゃないか。そのことばがずっとわたしの耳に残っていた。

そうだと思う。ブルースなんてただの唄。かわいそうなあたし、みじめなあたし。いつまで、そう歌っていたら、気がすむ？こんな目にあわされたあたし、おいてきぼりのあたし。ちがう。わたしたちはわたしたち自身のもので、ちがう唄だってうたえる。ちがう唄うたって、よみがえる」

女たちは、あんな、ブルースなんていってもさ、ただの唄じゃないか、ということばが気に入って、ふたたび立ち上がり、拍手した。⁽¹⁾—

冒頭に引用したのは、作者である藤本和子が、1980年代のアメリカ、ウィスコンシン州懲治局に働く臨床心理医と、その女性グループ、それから、彼女が担当している刑務所の女性に関する聞き書きをまとめた本の引用である。この女性グループは、名前についてはおらず、誰がメンバーであるという発想もなく、流動的であると記されている。臨床心理医のジュリエットの私的な友情のネットワークであり、専門の分野も職場も違うのだが、黒人であることと、黒人であることに熾烈な意識を持っているという共通項がある。

臨床心理医、テレビ局のオーナー、女性囚、などさまざまな立場の女性の話から、一言で「黒人」といっても、周りの人よりも黒いこと、あるいは逆に白いことによって、差別を受けたり、自分の容姿についての悩みを抱えたりしていたことがわかる。あるいは、教育に対して懐疑的な考えを持っている臨床心理医のジュリエットの話からは、高等教育を受けることで、差別する側の価値観を教え込まれ、同化される危険性をはらんでいることを、再確認させられる。また、ジュリエットが担当している、釈放前の女たちのセンターである、「女

たちの家」の女性たちの聞き書きもある。

タイトルに「ブルース」という言葉が出てくるが、この本で扱われているのは、狭義の音楽としてのブルース (blues: 19世紀後半、アメリカ南部で発祥したと言われている音楽。アフリカからアメリカに連れてこられ、奴隷労働をさせられた黒人たちの、労働歌、霊歌が結び合わさって生まれたとされている。) についての話ではない。

しかし、この本を読むきっかけを与えてくれたのは、2020年の夏に参加した、オンラインでのこども向けジャズ教育プログラムであったことを記しておきたい。文章全体にかかわるので、すこしその内容を紹介したいと思う。

ジャズハープ奏者、ジャズ教育者であるリザがクラスで述べていたのは、アメリカの学校では伝統的にブルースやジャズの歴史について教えられていないため、黒人のこどもたちは自分たちのルーツを知る機会が公教育のなかで与えられていないという話であった。彼女がとりわけこども向けにジャズを教えるカリキュラムをつくりあげたのは、自分たちのルーツを知り、自分自身に誇りを持って表現してほしい、という思いにもとづいている⁽²⁾。

クラスのなかでは、それぞれの時代のジャズの音楽的な特徴や、代表的なミュージシャンなどを、ちいさなこどもでも楽しみながら学べるように工夫が凝らされている。とりわけ印象に残ったのは、ブルースを教える際、まずこどもたちに自分の気持ちを絵で表現させることだった。旧いブ

ルースをBGMにしながら、こどもたちは、笑った顔、泣いた顔、怒った顔、さまざまな顔を、いまの自分の気分を表すように描いていく。彼女が重視するのは、そのように、喜怒哀楽を表現し、周りの人々と共有することが、伝統的な黒人のコミュニケーションの仕方であり、ブルースの精神なのだということだ。もちろん、音楽的な形式は存在するのだが、もっとも重要なのは、その形式だけを学ぶことではなく、精神を学ぶことだと述べている。これまでも、ブルースの歴史などは表面的にはあるが、本を読んで学んできたつもりであったが、このクラスを受けて、もっとその歴史を勉強してみたいと思い、インターネットで調べて出逢ったのがこの本だった。結果として、当初予想していたような、音楽的な内容ではなかったのだが、この偶然の出逢いから、自分自身の経験を言葉にしていくことに関して、たくさんの気づきを得た。ブルースの根幹には、自分の感情や経験を言葉や音にする、という作業があり、その意味では、この本を読んでいる間、さまざまな彩のブルースと、聞き書きをする藤本の応答 (response) を聴かせてもらったとも言えるかもしれない。

1. ^{いろ}彩の差異

本書は、ある土曜日の午後、ジュリエットをふくめた5人の女性が、それぞれ自分のことを藤本に語ってくれた記録から始まる。

この5人について、かんたんに紹介したい。

—1人目。ジュリエット・マーティン。

1946年生まれ。フロリダ州キーウエスト出身。女中をしていた母と、労働者であった父、六歳上の兄がいる貧しい家庭で育った。心理学の博士号を持ち、大学院を終えてから12年間、ウィスコンシン州懲治局管轄の刑務所所属の臨床心理医として働き、最近自分の診療所も共同で開業した。子どもが三人と大工職の夫がいる。

彼女は、「南部出身で、貧乏で、色がとても黒かった」ことで苦しんだ。家のなかでは、働くことと、教育を受けることが大切とされ、教育こそが父母の境遇を乗り越えさせるものだと言われていた。しかし、高等教育を受けた彼女は、教育というものが持っている罨に危機感を持っている。教育によって、この国の教育が子どもを洗脳する性格を備えていると考え、黒人は奴隷の身分に貶められた過去を恥じ、自分たちの精神の根であったはずのアフリカについても、西欧の侮蔑の眼で見たとして眺めることをしいられてきたと言う。

両親は、ジュリエットに対しては人種差別に対して抗議することを鼓舞したにもかかわらず、兄に対しては受け身でいるよう教えていた。ジュリエットは長い間このことが気になっていたが、いまでは、母は、リンチのあった時代を生きてきた人であったため、男が高等教育を受けようとするのが、あまりにも大きな危険をおかすことになることを恐れ、兄を守ろうとしたのだろうと考えている。

ジュリエットを支えているのは、怒り

である。黒人は怒ってはいけないという考えは正しくない。怒りは動機を生み出すエネルギーなのだから、それを方向づけることさえできればいい。怒りは正当なのだから、と考えている。

—2人目。ジャニス・カミングス。

1950年生まれの三十五歳。十二歳の娘がいて、現在は独身である。「わたしはジュリエットよりさらに一、二度黒いのだから、こんどはわたしが話す番よ」と言って二番目に話し始めた。家庭は下層中流階級で、父は州政府の仕事をし、母は末の子が幼稚園に行くようになってから働くようになった。裕福ではなかったが暮らしは成り立っていた。

現在は、ウィスコンシン州懲治局の刑務所から仮釈放になってする者たちを担当する保護観察官の仕事をしており、ソーシャルワーカーの資格を持っている。

こどものころ、ジャニスは「まっくろけだという』理由で、のけ者にされて、遊び友達もいなかった。色の白い従妹のことを心から憎んでいた。成長してからは、男性のことで苦しんだが、新しい化粧品が出たことと、結婚して、女の子が生まれ、赤ん坊が彼女より黒かったことで、これでいいのだ、と考えられるように変わった。ジェイムズ・ブラウンの「大声でいうんだ、おまえは黒い、そして誇り高い」という歌⁽³⁾も、ジャニスにとって「黒く誇り高く」という意識に目覚めるきっかけとなった。

ミルウォーキーの公民権運動にもかかわったが、ふりかえってみると、公民権を

獲得する運動、という思想に深い関心を抱いていたのか、自分が参加できて、自分の膚のことを思いわずらわずに、自分が自分のままいられる場所にいたかったから加わったのか、あまりはっきりはわからない。結婚して、離婚して、こどもがひとりいるが、当時の自分は、自分が何者であるか知らずにいたことで、結婚そのものにもきちんと向き合うことができなかつたのだと考えており、自分が満足できるようになったらまた結婚してみようと思っているが、いまはまだ自分に満足していないという。

彼女の生を支えてきたのは、屈服したりあきらめたりしなかつたことだと思っている。

ジュリエットと、自分の母を尊敬している。

——**3人目。リビー・フォスター。**1941年生まれ。四十四歳。二度結婚して、二度離婚した。こどもと孫がいる。いまでも結婚したいと思っている。「だって、すばらしいじゃないの！誰かひとりのきまつた男と暮らすのは！」

父は黒人で、母はアメリカ先住民。北カロライナに生まれ、高校を卒業してから、秘書養成学校へ行き、こどもをふたり生んで、放送学院へ行き、離婚した。それから Wisconsin 大学の舞踊科へかよって、そのあと黒人舞踊団で振り付けの仕事をした。公立学校の指導主事補佐、保険の勧誘、バーのホステスなど、さまざまな仕事を経験したのち、現在はジャニスと同じように、刑務所から仮釈放で出てくる人々の保護観

察官の仕事をしている。

ジュリエットやジャニスが、自分の膚の黒さに悩んだのに対し、リビーは、まっすぐな長い髪で美しい容貌をしていたことで、学校で服を汚されたり、男たちにふざけたことを言われたりして、いやな思いをしたことが多かったという。中学校に入ってから人気者になり、フィギュアスケート大会で優勝したり、高校ではじめての黒人のバトンガールになったりした。

現在まで、人種偏見で苦労したことはなかった。黒人の歴史について何かを学んだこともなく、膚の色が問題になる状況に直面したこともなかったが、現在の仕事で、政府の官僚主義的な傾向とぶつかったとき、人種による偏見による嫌な経験をした。

自分が生き延びてきたのは、離婚のおかげだと考えている。離婚して、子供に対して責任があったことが、自分を前へ前へと押し出してくれた。現在の保護観察官の仕事は、人間が好きで、人間とつきあうのがうまい自分にとっても合っている仕事だと思っている。

——**4人目。メアリ・ヒンケル。**ミルウォーキー生まれ。年齢や生年に関する言述はない。

メアリは黒人の父と白人の母から生まれた。母は、結婚してから三十年以上絶縁されており、白人の集団には敵意を抱いていた。母を受け入れてくれたのは、黒人の共同体だった。

メアリは、白い膚と、まっすぐな髪の色で、親戚や友達からいじめられたり、敵

意をもたれたりしたという。もっとも、そのようなことをするのは黒人で、白人にとってはただの黒人にすぎなかったため、メアリはどちらにも差別されていたことになる。自分が五倍くらい膚の色が黒くなれるのなら、どんなことでもすると思ったものだったと、当時のことを振り返る。

メアリの話からわかるのは、黒くとも、黒くなくとも、どちらにせよ苦しむということであり、黒人であるとは、単に膚の色をさすのではないということである。

高校時代はずっとアルバイトをし、最後の二年間は自分で働いたお金でまかかった。卒業したら、三千ドルの貯金を持ってカリフォルニアに行くつもりだったが、家族に反対され、ミルウォーキー地区職業短期大学に進学し、一般教養の単位をとって、ウイスコンシン大学に転校した。大学院にも進み、心理学の修士号をとった。そのころは、もう結婚していて、娘が生まれた。大学院に進学した夫とは、一時期別居したが、現在は一緒に暮らしている。

危機の状況にあるとき、自分を支えるのはこどもたち。目標をより高く定めて、エネルギーを使い、自分自身と競合することが自分を支えてくれると感じている。

—5人目。デブラ・ジャクソン。

1950年、ミルウォーキー生まれ。三十五歳。ほかの女性たちは、質問されるまでもなく、自分の結婚や離婚、こどもの有無について話したが、デブラは話さなかった。聞き手の藤本は、デブラが何もいわなかったのであればそれでいいと考えて

いる。

デブラは、大学で社会学を勉強して、それから法科大学へ行って弁護士になろうと考えていたが、とちゅう放送局でアルバイトをしたら、それがおもしろくて、そのまま放送の世界にいついてしまったという。藤本がであった当時は有線テレビ局の経営者であった。その後、極超音波テレビ局の共同オーナーになったようだ。

両親は、どちらも高校を卒業することもできなかった人たちであったが、こどもたちには大学へは行かねばならない、という教育をしていた。

デブラは、自分がまわりの子どもたちとじっくりいかない、という感じを持っていた。黒人の友達とも、少数の白人の友達ともそうだった。

ただ、学校の成績がよく、行動に問題がない（傍点ママ—筆者注）ということで、白人の教師たちは彼女を黒人の子どもたちから引き離した。そのことにより、黒人の子どもたちは、デブラが自分たちに対して優越感を持っていると決めつけ、恨みを抱いたが、デブラ自身は自分が黒人であることをいつも意識していたし、後に、能力があっても黒人であるだけで実現しない夢があるということも知った。父親はいつも黒人の偉人について話してくれ、自分たちはすばらしい集団に属しているのだと教えてくれた。デブラは、白人がそれほど大した人たちだと思ったことはないし、白人で自分の理想の人物をいえ、と言われてもいえない、と思う。

五人の話からわかるのは、ジュリエットやジャニスのように、膚の黒さに悩んだ過去を持つ黒人女性がいるのに対し、リビーとメアリののように、膚が白く、美しかったことによって、周りの黒人や親戚に敵意を抱かれて苦しんだ女性もいるということである。構造を生み出しているのは、白人の思想体系であり、その価値観を内面化することにより、生み出されたものであると、いまでは五人とも考えている。そして、ジュリエットが警鐘を鳴らしているのは、多くの黒人の子弟が、教育は社会的な地位の維持や向上を勝ち取る手段だといわれて成長するが、多くの親は、この国の教育が子どもを洗脳する性格を備えているということにあまり注意を払っていないからである。

冒頭で紹介した、子ども向けのジャズ教育カリキュラムにおいて発案者のリザが述べていたこととおなじことを、ジュリエットも述べている。それは、子どもたちに歴史を教えることの重要性であった。その歴史とは、社会に同化させるための歴史ではなく、学校では教えられていない歴史である。

昨日、何が起きたのかも知らず、明日がどのような日になるのかもわからず、すべてが<いま>と<ここ>という軸で回転しているなら、わたしたちは電極に乗せられた鼠と変わるところはなく、そうなれば、ただ身を横たえ死ぬのを待つよりしかたないじゃないの。機会もなく、職もなく。自分では全く抑制することのできない衝撃が、否応なしに外からやってくるだけだと

したら⁽⁴⁾。

2. ことば探しのたたかい

「女たちの家」は、刑期の終わりかけている女たちや、仮釈放が決まった女たちが収容されている、刑務所滞在の最終地点である。警備は最小限度で、彼女たちはそこから就職先やさまざまな学校に通ったりすることもでき、刑期を終えた人々の社会復帰の衝撃をやわらげるために町の中に作られた刑務所である。しかし、予定の時間に帰らなかったり、逃亡を企てたりすれば、刑期が延長されたり、ふたたび市外の刑務所に送り返される。逃亡を企てて、成功した例はない。

仮釈放や刑期を終えて、社会に復帰した者たちが、ふたたび刑務所に戻ってくる場合は、黒人女性の場合は七割だと女囚のひとりが藤本に教えてくれた。その理由は、刑務所から出ても、すぐに普通の生活ができるわけではないこと、働く場所がなかったり、家族や親戚が服役の間に遠のいたり、もともとひとりぼっちの者もいる。経済力もなく、心を通わせることのできる相手もなく、孤独に躓いて、まるで胎内に戻るように刑務所に戻ってしまう者も多い。

ウィスコンシン州懲治局に働く、臨床心理医のジュリエットは、この循環を断ち切り、釈放された女たちが社会復帰に成功して生きてゆけるように、彼女らを助けることのできる組織のネットワークを作ること考案した。

そして、一時保護センター、職業訓練所、職業適性検査センター、カウンセリングを

行方期間・組織などから「女たちの家」に代表を送ってもらって、話をしてもらい、困ったときに情報を与えてくれる人々を招いて教えてもらい、そういう組織や機関が互いに知り合うようになってもらいたい、という集会の原案を出したのは女囚たちであった。

ネットワーク作りのための計画を立て、準備をした女性たちのなかには、ついこの間まで「女たちの家」で服役した者も混ざっており、積極的に参加していた。また、長い刑務所生活の後、社会復帰の衝撃を感じ、模索している女性が話をすることも集会のプログラムに含まれていた。

「わたしは牢獄を出たけれど、わたしの中の牢獄をまだわたしから追放することができないのよ」と、殺人罪で14年服役して、仮釈放になったウィルマが言うと、「女たちの家」の女たちは椅子から立ち上がり、大きな拍手を送った。その拍手は、いまだに殺人の罪について苦しみ、刑務所の十四年の歳月にすべてを失った四十二歳の女の生との格闘を励ますものであり、その格闘から生まれたことばそのものへの拍手でもあった。

ジュリエットに招かれ、集会に参加した藤本は、この章を以下のような文章で結んでいる。

自らの生に意味をあたえ、生の輪郭を見せてくれる魔術はないか。混沌や茫洋にかたちをあたえることができるもののひとつがことばであるなら、それは魔術のようなものだ。

わたしは女囚から話を聞かせてもらっ

た。そしてその過程で、自分史を語りうる女たちのことば探しの過程が見えてくると感じた。自分史の輪郭が見えてきたとき、彼女たちは希望を持ち始めた、とわたしは感じた。彼女たちは自らを語る言語を生み出さなければならなかった。なぜなら、それは手近にあったものではなく、欠如していたものだったから。そこらに転がっている言語を拾ってきて語れるようなものであったら、彼女らはそもそも「わたしの中の牢獄」を抱えることにならずにすんだだろう。

わたしの中の刑務所、わたしの中の牢獄。くらがり。自らの生の意味を覆っていた。

彼女らのたたかいは、だからひとつには、ことば探しのたたかい。彼女たちの困難は他にも無数にあるし、圧倒的だが、ことば探しのたたかいを軽く見ることはできない。そのたたかいを通して、彼女らは、彼女ら自身の存在を回復する。明るみに引き出してくれる⁽⁵⁾。

「わたしの中の牢獄」を自分の中から追放し、自らの生を自らの手に取り戻すために、再出発の方法に関する具体的な知識がある。集会において、それぞれの組織が提供できる援助の形について話してもらうことの重要性をウィルマは語っている。釈放された後も、孤独に躓いて刑務所に戻る者が多いという事実は、人々のネットワークと、具体的な知識によって、社会復帰の衝撃がやわらぐ可能性のあることを示唆して

くれる。

3. 弱さで繋がること

2021年3月24日、藤田真理さんの「パート労働がわたしにもたらしたもの・失ったもの——自分史的アプローチ——」⁽⁶⁾という論文の書評セッションがオンラインで開催され、司会の茶園敏美さんの誘いで参加した⁽⁷⁾。

藤田論文では、男女平等の思想を持つ父のもと、「リケジョ（理系女子）」として大学を卒業し、就職した藤田が直面したさまざまな現実や、結婚・出産を経てパート労働をするなかで考えたことが当事者の立場から綴られている。

過度のストレスによる胃がんになったことを機に自分のやりたいことをやると決め、東大の上野千鶴子のゼミに参加しながら、研究を続け、職場のさまざまな権力関係や、自らの置かれた状況、自分史を、フェミニズムやジェンダーの言葉を用いながら分析、考察した力強い文章に、わたし自身も大きく励まされると同時に、自分史を語ることで、自分の置かれた状況を言語化すること自体の持つ力をあらためて感じさせられた。わたし自身、大学院に在籍していたとき、研究テーマを模索する中で、なんとか自分の置かれている状況を言語化しようともがいて書いた文章は、当時の自分のたしかな足跡であり、拙くとも、ことばと手を繋ぐことができたように感じている⁽⁸⁾。

大学院卒業後、大学の研究所で数年間勤務した後、一年半ほど企業で派遣社員として働いたのだが、その際に感じたさまざまな違和感や驚きをも、藤田さんの文章は言

葉にして照らし出してくれていると感じた。大学院時代、研究所勤務時代、派遣社員時代、すべてを通して、多くの人々にお世話になったが、研究室の先輩や友人たちとの繋がりやことばによって支えられた面はとても大きい。

女性囚たちが社会復帰するために必要な具体的な知識と、フェミニズムやジェンダーの言葉は、一見異なるように思えるが、自らの生を取り戻すために、知識や、学びのネットワークが果たす役割という視点から見ると、共通する点も多くあるように思う。

ここでもうひとつ、兵頭晶子さんの文章、『『生きている』ということを取り戻す——『プシコ・ナウティカ』と『千と千尋の神隠し』から——』⁽⁹⁾を紹介したい。

この文章は、執筆者である兵頭さんが、「生の危機」を経験し、一度は研究活動を休業した状況から、関西の実家での療養を経て、地域のカフェの手伝いなどをしながら、研究者として再起していく過程を描いたものである。

兵頭さんは、危機に陥ることで研究活動を休業せざるを得なくなった自分がそのカフェで働くことに求めていたのは、生活者としての自分を受け入れてくれる、「人の間(あいだ)で絆(ほだ)される」ことではなかったか、と述べている⁽¹⁰⁾。そして、共通するミュージシャンを愛する人々が集まるライブに通い、幾度も涙を流し、歌い、響き合い、救われたことを、以下のように綴っている。

それは、危機の経験者であると同時に、一人の生活者として、「生きている」ということを取り戻し、日常という名の〈ケ〉を更新していく過程でもあったと思う。今にして思えば、危機が訪れる前は、研究一筋な中で、幾度も気が枯れかけていたのだ、と。⁽¹¹⁾

そして、兵頭さんは、論文を再び書き始め、同時に歌をプロのミュージシャンに学び、人前で歌う機会を得るなかで、言葉へのこだわりから少しずつ離れ、一人の表現者として、歌や音楽の持つ豊かな幅と可能性に触れていく。「研究以外の何かを、人から学ぶという、私にとって稀有な経験は、自分自身が他者とともにあるという、優しい気づきに至らせてくれた」⁽¹²⁾ という記述からは、本来、自らの生を取り戻す力となるはずの研究が、「生きている」ということから自らを切り離すこともあること、その危機を救ってくれたのは、兵頭さんにとっては音楽であり、ともに泣いたり歌ったりする仲間や、カフェの常連さんたちとのやりとりであったことが伝わってくる。そして、そのなかで、「他とともにいること」「生きている」とは果たしてどういうことなのか、という問いに対する答えを紡ぐために、もう一度兵頭さんの中に「言葉」がよみがえってきた過程として、わたしはこの文章を読んだ。

一方、先に紹介した藤田さんの文章を読むと、上野ゼミにもぐりこみ、13年間通い

続けたことによって藤田さんが見いだしたものの、つかみ取ったものが以下のように綴られている。

上野ゼミに通ううちに、周りの人たちの中にそれぞれの「弱さ」を抱える人がいることにも気づいた。驚いたことに、彼らは自分たちが「来るべき場所」を見極めて来ていた。きっと私と同じように、自分の置かれた立場に違和感や疑問を抱えながら上野の言葉の、その一瞬の煌めきに吸い寄せられるようにしてここに辿り着いたのだろう。私はそのことに感動した。そして、私たちは同志だ、私は独りじゃないと思った。フェミニズムは、「世界の見方」を変えてくれた。自分が関わる社会の解釈の仕方を、ガラリと変えてくれたのだ。自分の個人的なことを政治的に・社会の枠組みの中で捉えられるようになり、自分だけを責めたり、世の中を恨むだけの生活から解放してくれた。「なぜ？」を発することは正しく、七転八倒しながら自力で答えを掴んでいかなければ納得できる人生が無いことを教えてくれたのだ。そして、フェミニズムは私が生きるために闘う武器になっていった。もう一つ、「当事者」という概念を忘れてはならない。私が自分の違和感や疑問に拘り続けたこと、ゼミでの学びを社会人の私が如何に生かすかが上野ゼミでの私の課題だったこと、そして「当事者」である自分を研究する「当事者研究」という手法に出会ったことが私に「経験の再

定義」という大きな可能性を与えてくれた。ガン患者、そして女性という当事者性。上野ゼミの中で学んだフェミニズムやジェンダー論の言葉と知。パート「労働」。そのどれが欠けても、今の私は無い。⁽¹³⁾

藤田さんのこの文章でとりわけ印象に残るのは、上野の言葉に触発され、矢も楯もたまらずもぐりこんだ上野ゼミで出会った人たちに、藤田さんが「弱さ」を見いだしていることである。「生きるために闘う武器」としての言葉と知を学ぶ場所で、強さではなく、それぞれの抱える弱さに藤田さんが気づき、自分は独りじゃないと励まされたことには、大きな意味があるように思う。それは、兵頭さんが、生の危機に陥る前の自分を「強い主体」とし、「強い主体」であろうとする自分を拒む、心身の側に寄り添おうとしたことと、どこかで響き合っているように思える。

4. ブルースと自分史

昨年受講したジャズのプログラムで、「ブルースは感情表現であり、その喜怒哀楽をみんなで共有することが、古くからの黒人たちのコミュニケーションだったのだ」という発案者のリザの言葉、とりわけ、「哀しいときは哀しいと歌えばいい。そうしたら周りのひとがどうしたの？と気にかけてくれるということをこどもたちに伝えたい」という言葉が深く心に残り、藤本和子の聞き書きと出会うきっかけになった。タイトルに「ブルース」とあるものの、音楽

のブルースの話は全然出てこない。しかし、ジュリエットと、五人の女性たちと女性囚たちの話を読み進めるうちに、わたしのなかで、いくつかの、一見バラバラに見える自分史が呼び起こされ、ジャズ教育のプログラムの記憶へともう一度繋がっていった。

本書の解説で、斉藤真理子は以下のように書いている。

聞き書きというのはとても不思議で、聞き手のそれまでの来歴というのか全旅程というのか、その人の見てきたこと、考えてきたことの総和が溶け込んでいる。表面には出てこなくても、内側で語りを支える。たぶん、単なる人生経験というより、どれだけ内的な欲求を持って他者と関わり合ってきたかが現れるのだと思う。／どんなに真剣に耳を傾けても、聞き手の装備いかんによっては聞き取れない音域がある。『塩を食う女たち』のあとがきに、藤本和子自身が書いていた。「無色透明のわたしが耳を傾けるのではなく、自分は誰なのか、と問い続けながら、わたしをつくってきた私的な体験や、歴史の背景や、にほん人としての意識の質を問い続ける」と。⁽¹⁴⁾（／は改行）

藤田さんの文章にせよ、兵頭さんの文章にせよ、単なる「論文」という枠には収まりきれない力強さを持つ文章を、この本を読んで繋げたいと思ったのは、聞き手である藤本和子の、聞き取る力によるところも

大きいのかもしれない。

自分史を語る上で重要なのは、自分史ということば自体が、すでに聴いてくれる他者を前提にしているということだ。そして、斉藤がいうように「聞き手の装備いかんによっては聞き取れない音域がある」のだとすれば、聴く側の間人も、ことば探しのたたかいをともに生きていることが求められるのではないだろうか。

ブルースで喜怒哀楽をうたうように、哀しいことも、可笑しいことも、ことばや文章にしながら、誰かと繋がっていけることを願う。

そしてなによりも、自分自身も誰かの呼びかけ (Call) に応えられる耳をすませていけることを。

註

- (1) 藤本和子『ブルースだってただの唄 黒人女性の仕事と生活』ちくま文庫、2020年、226 - 227頁。なお、文庫化は2020年だが、初刊は1986年、朝日新聞社。
- (2) このカリキュラムの紹介と、発案者のリザへのインタビューは以下の文章にまとめている。日高由貴「『こころのなかに歌があるよ』—アメリカ合衆国における子供向けジャズ教育カリキュラムの一例—」『大阪城南女子短期大学研究紀要』第55巻、2021年、133頁—143頁。(2021年6月頃オンラインで公開される予定)。
- (3) James Brown "Say It Loud, I'm Black and I'm Proud" (1968)
ジェームス・ジョセフ・ブラウン・ジュニア：1933-2006。アメリカ合衆国のシンガーであり、作曲家、編曲家、プロデューサー。マイケル・ジャクソンを始め、多くのアーティストに音楽的な影響を与えた。
- (4) 藤本、前掲書、31頁-32頁。

- (5) 藤本、前掲書、124頁。
- (6) 藤田眞理「パート労働がわたしにもたらしたものの・失ったもの—自分史的アプローチ」WAN女性学ジャーナル (2020年11月20日) b2b0f2f2084f58f253ce8724a6d79842.pdf (woman-action-network.s3-ap-northeast-1.amazonaws.com) (2021年3月30日取得) 兵頭、前掲論文、4頁。
- (7) 第51回上野ゼミ：藤田眞理「パート労働が私にもたらしたものの・失ったもの—自分史的アプローチ—パート労働とは何なのか？」書評セッション。2021年3月24日(水) 19時~21時、参加費無料でオンライン開催された。
- (8) 博士後期課程に在籍していた当時、ホテルのアルバイトの経験を含めた自らの状況を、「感情労働」という視点から言語化しようとした試みとして、拙論「わたしから/への旅」『日本学報』(大阪大学大学院文学研究科日本学研究室) 第三十号、2011年、85頁-101頁。
- (9) 兵頭晶子「『生きている』ということを取り戻す—『プシコ・ナウティカ』と『千と千尋の神隠し』から—」『文化/批評』(国際日本学研究会) 第8号、2017年、3頁-24頁。
- (10) 兵頭、前掲論文、4頁。
- (11) 兵頭、前掲論文、4頁。
- (12) 兵頭、前掲論文、5頁。
- (13) 藤田、前掲論文、23頁-24頁。
- (14) 斉藤眞理子「解説」、藤本、前掲書、311頁。